

日本の手織機 便り

2005年3月

第5号

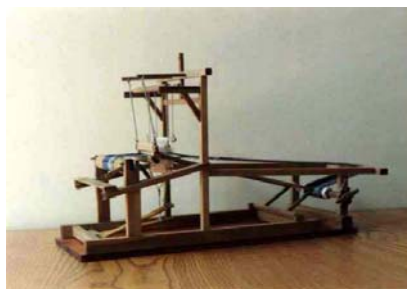


関東の西陣と呼ばれる群馬県桐生市には養蚕・織物の資料が多数あります。今回は森秀織物・織物参考館の手織機を中心に紹介します。織物参考館は1877年（明治10年）創業の森秀織物株式会社が桐生の歴史と織物文化の保存と展示を目的として1975年（昭和50年）に開館しました。のこぎり屋根の工場を展示室にして、繭から糸をとり染色して織り上げるまでの工程を一堂に展示してあります。また手織りや藍染の体験教室を開くなどの活動が活発に行われています。織物参考館には重松模型の原機が3台あり、写真右側が模型です。

手織機情報紹介

群馬県桐生市 森秀織物・織物参考館“紫”^{ゆかり}所蔵

高機1



桐生地方は昔から養蚕が盛んであり、江戸時代以後「桐生御召」の産地として全国的に知られるようになりました。この高機は明治期には同産地に約3000台が稼動していた代表的な機です。現在も織ることがあります。

高機2



明治中期以後、輸出用の幅が広い羽二重を織るために製作された全長540cm、箆幅260cmの超大型織機です。3人の織子が並んで座って織りました。しかし取扱いに難点があったため普及するには至らなかったようです。現在も織ることがあります。

空引機 (そらびきばた)



空引機は4～5世紀ごろ中国から日本に伝来したといわれます。長い間、錦や綾の宮廷織物業の流れをくむ京都の西陣で空引機が独占的に使われてきましたが、18世紀前半に桐生・足利にも伝播しました。昔の完全な空引機は現存していないといわれていますが、この機は黒羽藩主・大関増業により編纂された^{しかすうよう}止戈樞要 機織彙編 (1820年) に掲載された詳細な製図やその他の資料に基づき復元されたものです。

空引機では、機台の上にいる人が紋様図 (織物の組織図) に従って通糸と呼ばれる糸を引き上げると、それに連動してタテ糸が引き上げられ、そのときに下にいる人がヨコ糸を入れるという手順で紋様を織り出すようになっています。

ジャカード織機

空引機で上にいる人の代わりに組織図に従って孔を開けた紋紙 (パンチカード) を使ってタテ糸を制御するようにしたのがジャカード織機で、フランスのジャカルが1801年に発明 (1804年特許取得) しました。

ジャカード織機はコンピュータの祖先と言えます。日本には1873年 (明治6年) に伝えられました。

織物参考館、繊維博物館所蔵のジャカード織機は現在も織ることができます。また紋紙に孔をあけるピアノマシーンという機械も所蔵しています。



ジャカード織機
(織物参考館所蔵)



ジャカード織機 (1939年製)
(繊維博物館所蔵)

日本の手織機便り 第5号

発行 東京都小金井市中町2-24-16 東京農工大学工学部附属繊維博物館 田中鶴代

発行日 平成17年3月25日

繊維博物館URL : <http://www.tuat.ac.jp/~museum>

カットは芳綱：空引機が描かれた納札 (繊維博物館所蔵)